令和4年度　入学試験問題

医　学　部　（Ⅰ期）

英　語（必須科目）
数　学・国　語（選択科目）

注　意　事　項

1. 試験時間　令和4年2月4日，**午前9時30分から11時50分まで**
2. 配付した試験問題(冊子)，解答用紙の種類はつぎのとおりです。

(1)　**試験問題**(冊子，左折り)(表紙・下書き用紙付)

英　語
数　学(その1，その2)
国　語(その1，その2)

(2)　**解答用紙**

英　語		1枚(上端黄色)(右肩落し)
数　学(その1)		1枚(上端茶色)(右肩落し)
〃	(その2)	1枚(上端茶色)(左肩落し)
国　語(その1)		1枚(上端紫色)(右肩落し)
〃	(その2)	1枚(上端紫色)(左肩落し)

数学，国語は選択した1科目(受験票に表示されている)が配布されています。

3. 下書きが下書き用紙で足りなかったときは，試験問題(冊子)の余白を使用して下さい。
4. 試験開始2時間以降は退場を許可します。但し，試験終了10分前からの退場は許可しません。
5. 受験中にやむなく途中退室(手洗い等)を望むものは挙手し，監督者の指示に従って下さい。
6. 休憩のための途中退室は認めません。
7. 退場の際は，この試験問題(冊子)を一番上にのせ，挙手し，監督者の許可を得てから，試験問題(冊子)，受験票，下書き用紙および所持品を携行の上，退場して下さい。
8. 試験終了のチャイムが鳴ったら，直ちに筆記をやめ，おもてのまま上から解答用紙〔英語，数学(その1)，数学(その2)，または，国語(その1)，国語(その2)，計3枚〕，試験問題(冊子)の順にそろえて確認して下さい。確認が終っても，指示があるまでは席を立たないで下さい。
9. 試験問題(冊子)と下書き用紙は持ち帰って下さい。
10. 監督者退場後，試験場で昼食をとることは差支えありません。ゴミ入れは場外に設置してあります。
11. 試験会場内では，昼食以外は，常にマスクを着用して下さい。
12. 休憩時間や昼食時等における他者との接触，会話を原則禁止します。
13. 午後の集合は1時です。

国　語（その1）

一

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

幼児は比較的早い時期から、自己の身体を自己以外のものから区別するが、だからといって自我意識をもっているわけではない。身体としての自己の把握と並行して、志向野の諸対象はさまざまな価値づけをともないつつ、自己のまわりに配置され、分節化されるが、自我意識が成立するためには、このような（自己中心化）がおこなわれると同時に、はたらきとしての他者の身体への同調と応答を介して、もう一つの中心化の焦点としての他者が把握されなければならない。主体としての自己の成立は、主体としての他者の把握と相関的であり、それはまた対他存在（他者にとっての客体）としての自己が把握されることでもある。つまり自他の主体性が把握されると同時に、［　①　］が自覚されなければならない。

身体は「……にむかう」指向的構造（注1）（中略）である。そのかぎり［　②　］には、「……」と「にむかう指向的構造としての自己」とを分つ否定性がそのうちに潜在している。しかし向性（注2）的構造のレヴェルでは、この否定性は明瞭ではない。否定性が明瞭になり、前意識的な自己把握に達するのは、志向的（注3）構造のレヴェルにおいてである。志向的構造としての身体は、その否定性によって世界を世界としてあらわれさせつつ、たえず世界から距離をとる。［　②　］には他者が存在しなければならぬ理由はないから、他性としてのものを介する志向的構造の自己把握を考えることは可能である。バラを見るということは、前意識的にしろ、バラを私ではないものとしてとらえつつ、同時に私をバラではないものとして把握することにほかならない。

しかしこの場合に把握される私の［　③　］は、何かではないものとして、そのかぎりにおいて何かに準じて把握された［　③　］である。それは自発性であるかぎり単なるものではないが、ものと相関的に、ものにたいするものとして把握された、いわば対もの的な自己あるいは間もの的な自己にすぎない。またアヴェロン（注4）の野生児や狼に育てられたインドの狼少女アマラ、カマラは、われわれがふつう理解しているような意味での自己意識や他者意識はもたないであろう。動物といっしょに暮し、動物を他性とするかぎり、対もの的な自我のレヴェルにとどまってはいないであろうが、狼性あるいは動物性と相関的に形成された、狼レヴェルの自我あるいは間動物的な自我のレヴェルを大きくこえることはできないであろう。

真の自我は、何かではなく、誰かではないものとして私をとらえ、私ではないものとして誰かをとらえることからはじまる。［　A　］そのような誰かは、対象としての他者ではなく、主観としての他者でなければならない。それは主観としての私ではないもう一つの主観として他者をとらえ、主観としての他者ではないもう一つの主観として私をとらえることによって把握される。サルトル（注5）が指摘したように、そのような主観としての他者の体験が、たとえばシュウチ[a]である。われわれは風呂に入るとき、風呂桶にたいしてはずかしがりはしない。私がはずかしいのは、私

を見る主観としての他者にたいしてである。気がついてみれば、それは他者ではなく、壁にかかったレインコートであるかもしれない。しかし私がはずかしさを感じたとき、私が把握したのは、主観としての他者であって、決してレインコートではない。この錯覚の背後には、すでに［　④　］が前提されている。

赤ん坊は、さいしょ人の顔にもオモチャにもひとしく笑いかけるが、やがて照れたり、人みしりしたりするようになる。ものに照れたり、ものみしり(?)したりはしないのだから、子供はものと他人とを区別しているといえよう。また見られていなければ照れないのだから、そのさい意識されている他人は、人の形をしたものというにとどまらない。子供は自発的な主観性としての他人に照れるのであり、自己の対他存在に照れるのである。しかも幼児の他者意識は、照れることや人みしりのように、ネガティヴなものとはかぎらない。むしろ幼児は、見られていることを好むのがふつうである。一人で遊んでいるとき、母親が見ていないのに気づくと、幼児は怒って母親の視線を自分の方にひきつけようとする。

〔　B　〕自己と他者との分化がすすむにつれて、子供は人に見られると動作がぎこちなくなったり、はずかしがったりする。[a]シュウチの時期(三～五歳および思春期)が、他者を鋭く意識する時期であると同時に、自己意識が鋭敏になる時期でもあるのは、自我意識と他者意識とのこの根源的な相関性をよくあらわしている。自己は他者の把握をとおして自覚され、他者は自己の自覚につれて明瞭に分化される。したがって最初にあるのは、新生児にみられるような、自己と他なるものとが未分化な原初的共生 symbiose(注6) ないし混沌性 confusionisme(注7) の状態であり、そこからしだいに[b]ダセイ的なものと自発性としての他者とが分化され、［　⑤　］と考えなければならない。

このような原初的共生とそれからの他者の分離が可能であるということは、われわれが単に[c]ヒフのうちにとじこめられた個体でもなければ、個体化できない純粋の〔　ア　〕存在でもないということを示している。あたかも記号が形態としてはそれ自身のうちに自足しながら、はたらきとしては自己自身をこえてゆくように、われわれは対象としての形態と構造をもつかぎり、[c]ヒフのうちにとじこめられているが、その形態と構造は、生きているかぎり、[c]ヒフのうちにとじこめられてはいないはたらきとしての指向的構造の一契機にほかならない。そしてわれわれはこうした指向的構造のもろもろの指向において生きており、やはり指向的構造である他者の身体の動作や姿勢や表情など、さまざまの指向のあらわれを介して、他者の指向に共振し、同調する。それは向性的レヴェルでおこなわれることもあれば、志向的レヴェルでおこなわれることもある。その典型は模倣であろう。そこにあるのは感情移入というよりは、身体的指向の移入であり、私の指向的構造が、他者の指向的構造と共振ないし同調する現象である。

模倣は〔　イ　〕に他者の動作を再現することもあるが、しだいに手や肩の運動に省約され、やがて単なる筋肉の緊張による模倣行動の下描き(行動的・筋肉的素描)におわる。さらには筋肉の緊張さえ消失して、他者の行動を単に知覚している状態にいたるが、ベルグソン(注8)が指摘したように、知覚が可能的行動の下書き(知覚的素描)といった性格をもっているかぎり、それは模倣行動

ない応答行動の内面化された素描として、やはり指向的構造の潜在的な共振ないし同調をともなっている。それはあたかも無線の受信が同調 tuning によって可能となり、受信にたいする応答(発振)と相手によるその受信が、同調によって現実化されるのにも似ている。〔　ウ　〕な踊りをみていると体がむずむずして、おもわず踊りだしそうになり、幼児が他人や動物の動作をみていたあとで、よういに模倣にうつるのはそのためである。われわれは他者の行動を知覚しつつ、つねに模倣あるいは応答のかまえをし、ひそかにその下描きをしているといえよう。

われわれが他者を客観的にながめ、理解している場合には、他者の行動の場――他者に中心化された有意味的環境――のヴェクトルや行動の対象の意味は、私の行動の場のヴェクトルや行動の対象の意味とかならずしも直接的にはかさなってはいない。ところがゲームや労働のような共同行動の場合には、他者の行動の場と私の行動の場のかさなりは、より広く、より深くなり、指向的構造の同調も的確になる。私は他者の行動の場を単に［⑥］だけではなく、ほとんどその場を私自身の場として生きる。神技に近いチーム・ワークとか、[d]レイミョウなアンサンブルとか呼ばれるものは、こうした行動の場の相互滲透(しんとう)ないし相互融合をあらわしている。

いまや私の行動の意味と行動の場が完成されるのは、他者の行動によってであり、他者の行動の意味と行動の場が完成されるのは、私の行動によってである。バスケットの試合やジャズの即興演奏のさい、私は他者の行動図式に私の行動図式を同調させることによって、他者の行動を下描きしつつ、私の〔　エ　〕ないし応答的な行動を現実化し、たえず共同行動の全体の環を完成させようとする。共同作業、[e]ユウギ、集団スポーツなどが、いちじるしく他者との親近感をまし、他者理解をふかめ、また子供の精神発達に大きな影響をあたえるのはこのためである。

ミード(注9)が指摘したように、子供は鬼ごっこやお客さんごっこのような[e]ユウギ、ルールのあるゲームや共同作業、ことにそれにともなう役割交換をとおして、自己の行動を他者の行動としてとらえ、他者の行動を自己の行動としてとらえることをまなぶ。そして私にとって〈私〉であるものは、他者にとって〈かれ〉であり、私にとって〈かれ〉であるものは、他者にとっては〈私〉であるという相互性を認識する。他者を主体化すると同時に自己を客体化し、主体としての〈私〉は、(1)他者、(2)私によって対象化された私、(3)私にとっての私の対他存在、という三つの次元に反応しつつみずからを形成する。〔　C　〕自我は、発生のはじめから、ながば私的であると同時に、ながば他者的であり、終始他者によって滲透されている。他者の存在は、私であるかぎりでの〈私〉の存在にとって構成的であり、たまたま居あわせた偶然的存在ではない。〈私〉は、独我論者が考えるような自己充足的な存在でもなければ、絶対的中心でもなく、関係的・依他的存在である。

しかし役割交換をとおして把握される自我は、まだ十分人格的なものとはいえない。〈役割〉とか、〈地位〉とか、人間関係における〈位置〉とかは、多かれ少なかれ交換可能な非人格的なものである。ここでは他者は、私の前に、外面的な距離をへだてて存在している単なる対象にすぎない。〈私〉は〈かれ〉に人格的にかかわることはなく、両者の内面的距離は、外面的距離いかんにかかわらず遠くへだたっている。そして人格的なかかわりがまったく失われるとき、〈かれ〉は

〈それ〉に転落し、私は物や道具にたいするように他者にたいし、物や道具として他者をあつかうようになる。こうして他者を三人称的な〈かれ〉あるいは〈それ〉としてグウ[f]するとき、〈私〉もまた人格の三人称的な表層にとどまっており、そのようなものとして自己を形成する。ブーバー[注10]の言葉をかりれば、私は〈われ―かれ〉の〈われ〉あるいは〈われ―それ〉の〈われ〉にとどまっているのである。

人格的な自我は、このような交換可能性をとおして把握される自我とコウサク[g]しながら形成されるが、それ自体としては、交換不可能な存在として自覚され、それは、同じく交換不可能な人格として、他者の把握とソウソク[h]している。人格的自我は、他者に〈なんじ〉と呼びかけ、〈なんじ〉としてむき合う関係のなかで、すなわち〈われ―なんじ〉の〈われ〉[イ]として形成される。ここでは他者は、外面的距離いかんにかかわらず、内面的にはほとんど距離をくだてることなく私に現前し、私と他者とは、両者の存在をともに新たにするような内面的なかかわりをむすぶ。それゆえ自己把握の深まり、つまり人格性の深まりは、他者把握の深まりと相関的であり、他者把握の深まりは、ふたたび自己把握の深まりをみちびく。こうして自己は、さきにのべた向性的構造のレヴェルでの不透明性とともに、志向的構造のレヴェルでのはかりつくせない独自の冥さ[ら]、深さをもつのである。

このようにして形成される間人格的な自我にあっては、自由は、他者を対象化し、物化する全面的自由と、他者によって対象化される全面的非自由の交替としてではなく、他者の自由によって〔　オ　〕に制約されたかぎりでの自由としてあらわれる。もし他者が自由な主観性であることを否定すれば、もはや私は主観性としての他者を体験することができず、主体としての他者の把握と相関的な人格的自己の自覚を失うであろう。〔　D　〕もし私が自由な主観性であることを否定すれば、私は自己をも、私を対象化する他者をも把握することができないであろう。いずれにしても私は、真の意味での自己、すなわち対他者的・間人格的な自己であることをやめるだろう。それにもかかわらず、いったん自己と他者が分化するやいなや、われわれはみずからの出生を忘却し、その起源を自己自身におおいかくす[ウ]。そして自己であるかぎりでの自己が、さいしょから独立の主観性であるかのように思いこみ、自己の全面的な自由をカンテツ[i]しようとして、たがいに相剋する[そうこく]のである。

しかしこのような自我概念は、自己と他者が分化したあとで考えだされた二次的な概念であり、一つの抽象であるばかりでなく、［　⑦　］でもある。相剋の前提には、相剋する自己と他者とがそれにもとづいて分化してきた根源的なかかわりが存在する。もし自己と他者がさいしょから孤立した主観性であるなら、われわれは孤独を感ずることさえないだろう。われわれは根源的に他者とむすばれた存在であり、他者を介してはじめて自己として存在しはじめたからこそ、自己を独立の主観性として意識すればするほど、ますます孤独を感ずるのである。エ自己の自覚の深まる思春期は、また孤独を深く感ずる時期でもある。自己と他者とをア・プリオリ[注11]に独立した主観性とするかぎり、サルトルが主張するように、両者の関係は相剋でしかありえず、この相剋は結局ザセツ[j]せざるをえないであろう。というのも自由としての自己は、さいしょから自由とし

ての他者とのかかわりにおいて形成され、自覚された自己であり、自己の主観性は、 ⑧ だからである。

こうして他者は、私が自分を私として認識するための条件であるとともに、私としての私が存在するための条件でもある。私は他者を自己の存在条件として発見するのである。このような ⑨ の世界は、私が他者を意識の対象としてとらえ、かつ自分が他者の意識の対象となっていることを自覚することをとおして把握される。前者は他者の対象身体を介して、後者は私にとっての私の対他身体を介して了解されるのであり、両者の背後には、私の主観身体と他者の主観身体の把握が潜在している。

それゆえ自己あるいは他者を意識の対象としてとらえることは、自己あるいは他者を主観性としてとらえることと矛盾しない。むしろそれは ⑨ の世界が成立するための条件でさえある。対象化が相剋をもたらすのは、われわれが他者を対象であるにとどまらず、単なる物としてあつかい、道具としてグウするときであり、また他者からわれわれが物化され、道具化されるときである。 ⑨ としての〈自己と他者〉の根源的関係は、もっぱら相剋を基礎づけるわけでもなければ、共同存在を基礎づけるわけでもない。それは相剋と共同存在の前提にあって、それら二つの在り方を可能にしている基盤なのである。

（市川　浩『精神としての身体』一部省略）

（注1）指向的構造：われわれ人間が生体であるがゆえにもつ、外部環境や自己内部への働きかけの構造。

（注2）向性的構造：指向的構造の下位分類のひとつで、まったく意識を伴わないか、結果が意識されることはあっても過程が意識されることのない機能構造。

（注3）志向的構造：指向的構造の下位分類のひとつで、意識を伴うか、差し当たっては意識されていないが容易に意識化しうる機能構造。

（注4）アヴェロンの野生児や狼に育てられたインドの狼少女アマラ、カマラ：前者は一八〇〇年頃にフランスの森でみつけられ、動物に育てられて人間らしさをほとんど失っていたとされる少年。後者は一九二〇年にインドでみつけられ、狼によって育てられたと推定された少女たち。

（注5）サルトル：Jean-Paul Sartre（一九〇五～一九八〇）。フランスの哲学者・作家。

（注6）symbiose：フランス語。「個別化していない人の相互依存関係」を意味する。

（注7）confusionisme：フランス語。「幼児の心性における未分化状態」を意味する。

（注8）ベルグソン：Henri Bergson（一八五九～一九四一）。フランスの哲学者。

（注9）ミード：George H. Mead（一八六三～一九三一）。アメリカの社会心理学者。

（注10）ブーバー：Martin Buber（一八七八～一九六五）。オーストリア出身のユダヤ人宗教哲学者・社会学者。

（注11）ア・プリオリ：「先天的」を意味するラテン語（a priori）。

設問1 空欄 ① に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 主客の身体の区別
イ 主客の意識の相関性
ウ 主客の視点の交換可能性
エ 主客の存在の意義
オ 主客の論理の抽象的把握

設問2 本文中に二箇所ある空欄 ② に共通して入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 段階的　イ 文脈的　ウ 状況的　エ 感覚的　オ 論理的

設問3 本文中に二箇所ある空欄 ③ に共通して入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 個別性　イ 人間性　ウ 動物性　エ 具体性　オ 身体性

設問4 空欄 ④ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 識別能力
イ 他者体験
ウ 能力としての擬人化
エ はずかしさへの目覚め
オ 自己意識

設問5 空欄 ⑤ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア それと連携して自我意識は他者意識になりかわる
イ それに比例して原初的共生がいっそう具体的なものになる
ウ それとは無関係にはずかしいという気持ちや照れるという感覚がそなわる
エ それに応じて自己意識の領域がいっそう拡充する
オ それと相関的に自己が分化される

設問6 空欄 ⑥ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 借用する　イ 模倣する　ウ 放棄する　エ 占有する　オ 理解する

設問7 傍線部ア「〈われ―かれ〉の〈われ〉あるいは〈われ―それ〉の〈われ〉」の〈われ〉と、傍線部イ「〈われ―なんじ〉の〈われ〉」の〈われ〉との違いは何か、五〇字以上六〇字以内の一文で説明しなさい（句読点等の記号も一字分として数えること。冒頭の一字下げは不要）。

設問8　傍線部ウ「われわれはみずからの出生を忘却し、その起源を自己自身におおいかくす」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　われわれは今日、知性によってさまざまな自由を得ているが、かつては進化の諸段階で不自由の多い状態にとどまっていたことを忘れてしまい、そのような人類の祖先の歴史を顧みることもなく日々生活しているということ。

イ　われわれはみな、幼少期の頃、周囲や他者を明確に意識することのないぼんやりとした自我意識の内に生きていたが、成長とともに少しずつ自己の枠を外界へと広げ、ものごころがついてようやく他者を理解できるようになってきたにもかかわらず、そうした成長の経緯をほとんどすべて忘れ去ってしまっているということ。

ウ　われわれは誰でも、誕生直後は話すことも歩くこともできず、ただただ不自由な状態にあり、保護者の援助がなければ生存さえできなかったにもかかわらず、成人するまでの間にほとんどすべての人が自己の全面的な自由を獲得したと信じ、かつての不自由な赤ん坊の状態を思い出すことさえないということ。

エ　われわれはみな、その生において、自他を明確に区別できないような、自己と他者とが渾然一体となった状態からはじまっているにもかかわらず、あたかも他者の介在が一切なかったかのように思い込み、自己ははじめから自己のみで成立しているとみなしがちであるということ。

オ　われわれは誰でも、生まれた時はどのような人格か分からず、むしろ出生時の状況や家庭環境やその後に出会う他者との関係に応じて自己の人格が定まってきたものと理解しているにもかかわらず、自分の人格はもっぱら自らの努力において獲得したものであると信じて疑わないということ。

設問9　空欄 ⑦ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自己欺瞞（ぎまん）　イ　自己犠牲　ウ　自己否定　エ　自己暗示　オ　自己嫌悪

設問10　傍線部エ「自己の自覚の深まる思春期は、また孤独を深く感ずる時期でもある」とあるが、それはなぜか、四〇字以上五〇字以内の一文でその理由を説明しなさい（句読点等の記号も一字分として数えること。冒頭の一字下げは不要）。

設問11　空欄 ⑧ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　他者の主観性と相剋してはじめて明確になる相対的な主観性

イ　自己自身の主観性を掘り下げてはじめて認識できる根源的な主観性

ウ　自己自身の客観性と対照してはじめて輪郭をもつ相関的な主観性

エ　他者の主観性を前提してはじめて可能になる依他的な主観性

オ　自他相互の客観性を目的にしてはじめて成立する双方向的な主観性

設問12　本文中に三箇所ある空欄 ⑨ に共通して入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　前意識的主観

イ　原初的共生

ウ　人格的自己

エ　相互主観性

オ　統一的自他

設問13　文中の〔　ア　〕から〔　オ　〕に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次の四つの語群の中から一つ選び、番号で答えなさい。

[1]	〔ア〕複合的	〔イ〕特徴的	〔ウ〕情熱的	〔エ〕対話的	〔オ〕人為的
[2]	〔ア〕共生的	〔イ〕全面的	〔ウ〕熱狂的	〔エ〕相補的	〔オ〕内面的
[3]	〔ア〕原初的	〔イ〕部分的	〔ウ〕伝統的	〔エ〕補完的	〔オ〕肯定的
[4]	〔ア〕単一的	〔イ〕一般的	〔ウ〕個性的	〔エ〕相対的	〔オ〕心理的

設問14　文中の〔　A　〕から〔　D　〕に入る最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。同じ語の重複使用は認めない。なお、使用しないものが一つある。

[ア]　したがって　　[イ]　また　　[ウ]　しかし

[エ]　ところで　　[オ]　しかも

設問15　本文全体の要旨を二〇字以上三〇字以内の一文で書きなさい（句読点等の記号も一字分として数えること。冒頭の一字下げは不要）。

設問16　傍線部a～jのカタカナを文意に即して漢字で書きなさい（楷書で明確に書くこと）。

a　シュウチ　　b　ダセイ　　c　ヒフ　　d　レイミョウ　　e　ユウギ

f　ゲウ　　g　コウサク　　h　ソウソク　　i　カンテツ　　j　ザセツ

国　語（その2）

二　次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

私はチーズ好きだが、虫はどうしても苦手だ。だから、難題となるハッコウ食品は、カース　マルツウである。カース　マルツウはイタリアのサルディーニャ島でよく食べられている羊のチーズだ。「腐ったチーズ」、俗に「うじ虫チーズ」と呼ばれていることからもわかるように、このチーズには文字どおり生きた幼虫がひしめいている。このうじ虫チーズを作るには、まずこの地方で作られる羊のチーズ、ペコリーノ　サルドの厚切れを用意する。そのチーズは、通常のハッコウを通り越し、腐っていると思われかねない状態まで、放置する。腐敗していく途中で、チーズバエの幼虫が加えられ、このハエの消化器官から出された酸がチーズの脂肪分を分解するため、そのまま分解が進むとチーズは最後にはとても柔らかくなり、どろりとする。食べ頃になったカース　マルツウには通常、何千もの幼虫が宿っている。それどころか、地元の人々は、幼虫が死んでいるカース　マルツウは危ないと考えている。そのため、生きた幼虫が蠢いたままで、供される。

この幼虫は、白く透き通った蠕虫、つまりうじ虫で、体長はおよそ八ミリほど。うじ虫を取り除いてからチーズを食べる人もいるが、取り除かずに食べる人もいる。うじ虫がまだ蠢いている状態でこのチーズを食べる時には、この虫が自分やあたりの何かをめがけて飛びかかってこないように、手でチーズを覆う必要がある。刺激を与えると、うじ虫たちは一五センチもの高さまで跳ねることもあるからだ。このチーズは、サルディーニャ特産のパンと強い赤ワインと一緒に食することが多い。このカース　マルツウさえ「食べてはいけないチーズリスト」に載せておけば大丈夫、などと思ってはいけない。ヨーロッパのほかの国々でも、生きた昆虫を使ってチーズをジョウセイしているのだから用心が必要だ。たとえば、ドイツのミルベンケーゼやフランスのミモレットは、どちらもチーズの熟成や風味を出すのに、ダニの力を借りている。

ここまで読んで、こうした数々のハッコウ食品への私の説明にあなたが嫌悪感を覚えたとしても、無理はない。最も原始的な嫌悪感情の生来の目的は、［　①　］にあるからだ。だとしたら、なぜ、ハッコウした唾液や腐乱したサメやうじ虫蠢くチーズが、これほどまでに私たちを惹きつけるのか？　これは単に、腐敗のありとあらゆるシグナルを放つものを食べたがってしまう、という人間の習性のおかしな矛盾に過ぎないのだろうか？　そうではない。ほとんどの場合、何かに嫌悪感をいだくか否かというのは、見る側の気持ちが決めるものだからだ。

私たちは多くの場合、文化的な学習を経て、何かに対してひとつの立場をとったり、あるいは意見をもったりすることになる。たとえばアイスクリームにはスプーンというように、何かを食

べる時にはそれに応じた器具を使うことも、親から教えられる。どの食べ物が不快で、どれがそうではないのかを、先祖から受け継いだ文化から学んでいくのだ。「 ② 」といった具合だ。食べ物がなぜ、これほどまでに地域ごとに違う意味をもつのだろうか？　ひとつにはそれが、地域特有の植物や動物や微生物からつくられるからであり、その様相は各地で顕著に異なるからだ。たとえば、キムチを作る働きのあるバクテリアは、ロックフォール　チーズを作る時に使われるバクテリアと同じではない。また、文化が食べ物の価値を定める重要な要素となるもうひとつの理由は、 ③ ことにある。「私はこんなものを食べるけれど、あなたは食べない。私はここで生まれたけれど、あなたはあっちで生まれた」というように。文化を通じて学ばれるのは食べ物の価値だけではない。文化の境界線や国境を決めるのにも、食べ物が使われることがある。特定の食べ物の摂取を禁じるという方法は、 ④ に昔から行われてきた。たとえばローマ帝国では、ユダヤ教聖職者のラビたちは、酒を酌み交わすことでキリスト教徒とユダヤ人が親しくなっていくことを恐れていた。そこで、 ⑤ を避けるため、異教徒の作ったワイン、ビール、食品を摂取することを禁じた。ユダヤ教の聖典タルムードは、このことをさらりとこう記している。「彼らのパンと油は彼らのワインゆえに、彼らのワインは彼らの娘ゆえに、そして彼らの娘は『また別の何か』ゆえに禁じられている」

特にワインはブラックリストに挙げられていた。ワインには軽はずみでムキドウな行動がつきものというだけではない。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教がそれぞれの儀式で宗教的儀式を執り行う際、いずれにおいても独特の作法でワインが使われるからだ。そのため、ワインやワインから作るビネガー（酢）などの製品（ユダヤ人でない異教徒が作った）や、酢に漬けたピクルスのような食べ物でさえ、無造作に用いると偶像崇拝につながると恐れられた。ワインには製造者の神秘的な霊が宿ると信じ込まされていたため、キリスト教徒の作ったワインを飲むと霊的に穢（けが）され、キリスト教に染まってしまうのではないかと考えられていたのだ。

文化を区分する際にもうひとつ大切な目印は、食べ物を摂取したことで招く結果である。人間の体は、食べたものと同じにおいを発する。ニンニクを大量に食べたら、体臭もニンニクっぽいにおいになる。これは、食べ物に含まれている臭気成分が、肌や汗を通して放出されるからである。こうしたにおいは、共通の食文化を共有している限りは「同じものを食べているからあなたが好き」という根拠になる。その反面、同時に社会的な目印として働いて特定の集団を排斥し、ヘンケンを促す長い悲劇的な歴史にもつながっている。フランスの元大統領ジャック・シラクは、「生活保護に頼って生活している隣人の移民一家が立てる、騒音やにおいにも耐えなければならない」とフランスの労働者に共感を示して、逆に悪評を買った。外国人たちは変わったにおいのする未知のものを食べ、彼らの体からはそれが放たれる。こうしたなじみのないにおいは、 ⑥ ため、歓迎されず反感をいだかせる。においと感情には格別に強いつながりがあるため、においが喚起する直感的な不快感は簡単には克服できない。外国人や彼らが食べる食品は撲滅すべき悪臭を放っているということになるのである。

反対に、その土地に密着したものを食べていれば、深く受け入れられることがある。体臭がなじみのない「気にさわる」においでなくなるからだけではない。食べ物を認めるということは、［⑦］を暗に示すからだ。外国からやって来た人がもてなしを受ける時に、勧められたものを愛想よく食べることが肝心なのはこのためである。その人が客であるあなたに対して少しでも影響力がある場合にはなおさらだ。

（レイチェル・ハーツ著　綾部早穂監修・安納令奈訳『あなたはなぜ「嫌悪感」をいだくのか』一部省略）

設問1　空欄［①］に、作者が述べたいと思ったことを一行以内で記しなさい。

設問2　空欄［②］に、作者が述べた語を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　これはおいしそうだから食べていいのだ
イ　これは料理の大皿の上にあるから食べていいのだ
ウ　これは自分のために用意してくれたものだから食べていいのだ
エ　これは小皿に取り分けてお箸で食べればいいのだ
オ　好きなものから順に食べればいいのだ

設問3　空欄［③］に、作者が述べたいと思ったことを二行以内で記しなさい。

設問4　空欄［④］に、作者が述べた語を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「感染する」状態が生じるのを避けるため
イ　「不合理な」理屈が広がるのを嫌がるため
ウ　「不適切な」人々を遠ざけるため
エ　「不愉快な」儀式が生じないようにするため
オ　「不味い」食べ物による悪影響を防ぐため

設問5　空欄［⑤］に、作者が述べた語を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　文化を超えた結婚という危険な選択
イ　配慮を欠いた習慣という不躾な選択
ウ　深謀を含んだ因習という奇妙な選択
エ　風習に沿った殉教という異様な選択
オ　破戒を避ける強制という厳格な選択

設問6　空欄 ⑥ に、作者が述べたいと思ったことを一行以内で記しなさい。

設問7　空欄 ⑦ に、作者が述べたいと思ったことを一行以内で記しなさい。

設問8　傍線を引いた「ハッコウ」、「ジョウセイ」、「ムキドウ」、「ヘンケン」を漢字で書きなさい（楷書で明確に書くこと）。

三　次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

〈かぜに対する抗菌薬〉

かぜはウイルス感染が主な原因であり、多くの場合、抗菌薬は無効である。過剰な抗菌薬の使用は、薬剤耐性菌の発生という深刻な問題を引き起こす。そんな話は、医療従事者であれば誰でも知っているだろう。

薬剤耐性菌について何の対策もとらなければ、二〇五〇年には薬剤耐性菌によって全世界で一、〇〇〇万人の死亡が予測されるとの報告もある。

二次性の細菌性肺炎の予防目的に抗菌薬を使用してもよい、という主張には根拠がない。約一五三万の患者を対象としたイギリスの研究によれば、抗菌薬による二次感染予防の効果はほぼ認められず、抗菌薬による下痢や薬疹などの副作用は増加した。

にもかかわらず、かぜに対する抗菌薬処方が常態化している事実が日本でも報告されている。二〇一二年四月から二〇一三年三月までの期間、約七七七万件の外来受診のうち、約六八件で抗菌薬が処方されていた。そのうち約七〇％の症例の診断名が、急性気道感染症または胃腸炎であった。抗菌薬の内訳は、第三世代セファロスポリン（三五％）、マクロライド（三二％）、キノロン（二一％）などであり、広域抗菌薬が八八％を占めた。

かぜに抗菌薬を処方するという習慣は、昔から続けられている。その理由は、臨床医ならば先刻承知のことだろう。

二〇〇四年、『British Medical Journal』に「なぜ医師は効果のない治療を行うのか？」というタイトルの論説が掲載された。効果が不明で時に有害でさえある治療が、医師たちによって行われている。その理由として、「［　①　］」、「［　②　］」、「［　③　］」、「［　④　］」、「［　⑤　］」、「［　⑥　］」などが挙げられた。

かぜに対する抗菌薬に当てはめてみよう。かぜが「［　①　］」で治癒するとしても、医師は目の前の患者に対して「［　②　］」に迫られる。かぜをこじらせ肺炎にかかることがまれにある。そこで昔の医師たちは、肺炎予防という理由をつけて、かぜに抗菌薬を処方してしまった。それは「［　③　］」である。そうした処方は、患者と医師の間に合意が形成されているから、「［　④　］」。

患者は抗菌薬を服用後にかぜが治るため、抗菌薬はかぜに効果があると勘違いする。そして、その次にまたかぜをひいたときに、医師に抗菌薬処方を所望する。すると医師は「［　⑤　］」に従って抗菌薬を処方する。そうしていつのまにか、かぜに抗菌薬を処方することは「［　⑥　］」と化した。

時に医師は、かぜに抗菌薬が無効かつ有害であることを患者に説得することを試みるかもしれない。しかしその試みは多くの場合、徒労に終わる。説明に納得しない患者に根負けして、患者を帰すために「グッドバイ処方」をするはめになる。意地になって処方せずに患者を帰しても、フリーアクセスの日本においては、患者は別の診療所で抗菌薬を処方してもらう。そしてその患者

は、抗菌薬を処方しなかった医師のもとには二度と来なくなるだろう。

〈医師免許制度はいらない!?〉

医師になるには、医学部を卒業し、医師国家試験に合格して医師免許を取得しなければならない。医師免許を持たない者が、医師と同じ医療行為を行ってはならない。違反すれば刑事罰もある(例外として、看護師などが医師の指示のもとに一部の医療行為を行うことはできる)。

どの先進国でも同じ、当たり前のことだ。この当たり前のことに異論を唱えたのが、ノーベル経済学賞の受賞者であり新自由主義の旗手であるミルトン・フリードマンである。

彼はその著書『資本主義と自由』の中で、「医師免許制度は不要」という極端な説を唱えた。フリードマンの論述はなかなか巧みであり、相当の屁理屈であるにもかかわらず、騙されそうになるので注意が必要である。

フリードマンによる「情報の非対称性」についての説明は以下である。

「こうした免許制を法制化するときのお決まりの言い分は、公共の利益を守るためだという。―(中略)―彼らの言い分はこうだ。たいていの人は、自分の召使いすら賢く選べない。例えば、良い医者を見分けるには医学の心得がなければならないが、ほとんどの人はそうではないのだから、医者の選択にかけては無能力だ。したがって、無能力のせいで被害に遭わないように政府がすってやらなければいけない」。

フリードマンの唱える、無免許でも医療行為をやってもよい論拠はこうだ。

「医師の資格を国家試験で認定し、合格者はそれを表示できるが、無資格の医師が診療することも自由。ちょっとしたかぜくらいなら低料金の無資格医師に診てもらえばよい。外科手術などは有資格医師にやってもらえばよい。―(中略)―誤診・誤治療は、免許をもつ医師でも珍しくない。損害賠償などのルールを厳格にすることで、そのリスクはカバーできる」。

医師免許制度の弊害を、次のように説明する。

「アメリカ医師会は、アメリカの職業別組合の中でおそらくいちばん力が強い組織である。そして職業別組合で力が強いとは、その職業に従事できる人の数を制限できるということだ。その職業の技術水準にこだわるあまり、一流の技術を持つ者しか認めるべきではないと言いたくなるのはわかるが、しかしこれでは、そのために一部の人が医療を受けられなくてもやむを得ないと言っているのと同じことである」。

「医療の平均的な質というものがもしあるとしたら、それは、実際に行われた医療の質を平均しただけでは得られない。それでは、死ななかった人だけを対象に治療効果を判断するのと同じである。質を考えるときは、参入制限の結果〝行われなかった医療〟が増えたことも考慮しなければならない」。

「アメリカの医療費は世界一高い。最大の原因は、アメリカ医師会による参入障壁である。医療費が高いために貧困層が医療から締め出されている。医師資格を自由化すれば、リスク(＝質の悪い医者による質の低い医療)よりも、メリット(＝無治療放置の患者が治療の機会を得る)の

ほうが大きい」。

さて、フリードマンの御説に騙されてはならない。

〈医療技術の効果と費用〉

医療従事者は、目の前の患者を救いたい一心で、様々な医療行為を施す。効果に関するエビデンスがなく、リスクは確実に存在する治療でも、さほど躊躇なくやってしまうことがある。「 ⑦ 」という達成感が欲しいのだ。

しかし、もうそろそろそのような医療はやめるべきだ。エビデンスに基づく医療(evidence-based medicine, EBM)をさらに浸透させねばならない。治療を選択するには十分な理由が必要であり、不必要な治療は避けるべきだ。

もう一つ、これからの医療には、 ⑧ という視点が不可欠である。高額であっても、それに見合う高い効果があれば、その医療技術は使われるべきである。一方、従来の安価な医療技術に比べて非常に高額であるにもかかわらず、効果はほんの少しし上回らない医療技術は、選択されるべきではない。つまり医療技術の評価には、効果と費用という両軸が必要である。

EBMとは、個々の患者の診療やケアに関わる意思決定に際し、最新かつ最良のエビデンスを把握したうえで、個々の患者に固有の臨床的状況や価値観にも配慮した医療である。

EBMには様々な誤解がある。第一に、「EBMとはエビデンスを患者に当てはめること」という誤解。この種の誤解は近年かなり減ってきている印象である。

第二に、「エビデンスのない治療はやってはならない」という誤解。「推奨されない」と「やってはならない」は意味が異なる。

第三に、「ランダム化比較試験(RCT)が最強のエビデンスである」という誤解。研究デザインに基づくエビデンスのヒエラルキーなど時代遅れである。

EBMの意思決定に影響する要因には、「エビデンス」、「価値観」、「資源」の三つがある。効果に関するエビデンスに基づきつつ、リスクとベネフィットを比較考量するに当たって、患者の価値観に対する配慮も要求される。資源とは、ある医療を患者に適用するに当たって、それに割かれる費用・時間・労力を指すものである。資源が効率的といえるかどうかの検討も必要である。

エビデンスのない治療、ガイドラインで推奨されない治療を、やってはならないわけではない。しかし、それを行うならば、 ⑨ と ⑩ を勘案してもなお、あえてそれを行うことを ⑪ が必要である。単に「患者が望むから」という理由のみに依拠するのは、EBMとは言えないだろう。「他に手段がない」ことが、その治療を選択する積極的な理由にはなりえない。 ⑫ からだ。「副作用が少ない」ことも、その治療を選択する理由にはなりえない。 ⑬ の言い訳にはならない。

「 ⑦ 」という達成感を満たすことが、本当に患者のためになっているか、再考すべきである。患者の利益につながることはまれであり、むしろ不利益につながることもあるのではない

か。

効果がない医療技術は、医療経済の議論を持ち出すまでもなく、そもそも利用すべきではない。また、わずかな効果に関するエビデンスがあり、患者もそれを受けたいと願う治療であっても、高額である場合、それを使用する社会的な合理性があるかどうか、費用対効果評価も踏まえて慎重な検討が必要である。

（康永秀生『経済学を知らずに医療ができるか!?医療従事者のための医療経済学入門』一部省略）

〈かぜに対する抗菌薬〉

設問1 空欄 ① に入れるべき語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 疾病の生物寿命
イ 疾病の自然拡散
ウ 疾病への予防効果
エ 疾病の自然経過
オ 疾病の突然変異

設問2 空欄 ② に入れるべき語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何かをなすべき必要
イ 不要なことをしない選択
ウ 無用なことを分からせる必要
エ 何もしないか判断する必要
オ 何かをしたふりをする必要

設問3 空欄 ③ に入れるべき語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア (誤った)病態原理に対する葛藤
イ (誤った)患者心理に対する理解
ウ (誤った)病態生理モデルへの愛着
エ (誤った)病理現象へのオマージュ
オ (誤った)旧来作法への従属

設問4 空欄 ④ に入れるべき語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 誰にも知られない
イ 誰も疑義を挟まない
ウ 誰も不審に思わない
エ 誰しも隠蔽しようとする
オ 誰も気づかない

設問5 空欄 ⑤ に入れるべき語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 患者の受容
イ 患者の心理
ウ 患者の期待
エ 患者の希望
オ 患者の強要

設問6 空欄 ⑥ に入れるべき語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 義務
イ 儀式
ウ 風習
エ 権利
オ 命令

〈医師免許制度はいらない!?〉

設問7 筆者は、傍線部のように、フリードマンの説に騙されてはいけないと主張したが、それに続けて、どのような反論をしたのか。筆者の意図を推察して句読点も含めて一〇〇字以内で述べなさい。

〈医療技術の効果と費用〉

設問8 空欄 ⑦ に入れるべき語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 患者のためになるようにしたと思う
イ 現在の医療技術の頂点まで行った
ウ できる範囲内のことだけはやった
エ 医師としての良心に従って治療を行った
オ やれることはすべてやった

設問9 空欄 ⑧ に入れるべき語句を句読点も含めて一〇字以内で書きなさい。

設問10　著者は傍線を引いた部分で「エビデンスのない治療、ガイドラインで推奨されない治療を、やってはならないわけではない」とした上で、それを行うならば、一定の条件を満たす必要があるとして、空欄 ⑨ から空欄 ⑪ にそれを記載している。

まず、空欄 ⑨ に入れるべき語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　当該患者にとってその治療が回復につながる可能性
イ　当該患者にとってその治療が有害無益になる可能性
ウ　当該患者にとってその治療が死につながる危険性
エ　当該患者にとってその治療が無害無意味になる可能性
オ　当該患者にとってその治療が経済的損失をもたらす危険性

設問11　次に、空欄 ⑩ に入れるべき語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　資源の活用
イ　資源の流用
ウ　資源の浪費
エ　資源の喪失
オ　資源の増加

設問12　更に、空欄 ⑪ に入れるべき語句を句読点も含めて一五字以内で書きなさい。

設問13　著者は、傍線を引いた部分で「他に手段がない」ことが、その治療を選択する積極的な理由にはなりえないとして、その理由を空欄 ⑫ で述べているが、空欄⑫に入れるべき語句を句読点も含めて三〇字以内で書きなさい。

設問14　筆者は、傍線を引いた部分で「副作用が少ない」ことも、その治療を選択する理由にはなりえないとして、その理由を空欄 ⑬ で述べているが、この空欄⑬に入れるべき語句を句読点も含めて二〇字以内で書きなさい。